

「外国語科における思考力・判断力・表現力をどのように指導するか」

司会者： 紺渡 弘幸（仁愛大学）
酒井 英樹（信州大学）
パネリスト： 松浦 伸和（広島大学）
藤森 裕治（信州大学）
津久井 貴之（お茶の水女子大学附属高等学校）

【趣旨】

従来言語活動の充実や四技能の統合が求められてきたが、外国語教育において思考力・判断力・表現力の育成についてきちんと議論されてきたとは言い難い。次期学習指導要領では、各教科で育成すべき資質・能力を、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の点から整理され、提案されている。また、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業改善が求められており、外国語教育においては目的に応じたコミュニケーションのプロセスが学習過程として提案されており、その中で上記の学力の 3 つの側面が育成されることが期待されている。さらに、「言語能力の向上のための特別チーム」の提案により、言語能力の 3 つの側面（創造的思考・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面）を踏まえて、国語教育と外国語教育の連携が求められている。これらのことを踏まえ、本シンポジウムでは、実証データ等の知見に基づいて、外国語教育において、思考力・判断力・表現力をどのように捉え、また、どのように指導すべきか検討する。

① 思考力・判断力・表現力の捉え方と指導方法の提言

松浦 伸和（広島大学）

平成 19 年に思考力等は学力の 3 要素の 1 つとして学校教育法に明記され、すべての学校種、教科でその育成を図らなければならなくなった。その法改正を受けて、平成 21 年には評価の観点も、「思考・判断」「技能・表現」から「知識・技能」「思考・判断・表現」に見直された。「思考・判断したこと、その内容を表現する活動とを一体的に評価することを示すものである」ためである。

ここで言う思考力とは、批判的思考力を指すことが多い。それに関するさまざまな定義の共通点を基にして、楠見（2011）は規準（criteria）に従う思考、内省的（reflective）・熟慮的思考、目標志向的思考であると定義している。そのような要素が含まれなければならない。

では、人はどのような時に思考しているのか。発表者は、思考スキルを用いている時に思考していると考え。思考スキルとは、「考える方法」、「思考を具体的に記述した言葉」（泰山 2014）であり、比較する、関係づける、分類する、抽象化するなどがそれにあたる。次に外国語科での思考の対象は何であろうか。先行研究を基に分類すると、教材の内容、言語技能、言語パフォーマンスに整理できる。その中でももっとも重要なのは言語パフォーマンスである。そのため、新学習指導要領の目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」から始まっている。すなわち、外国語科においては、外国語でのパフォーマンスを取り上げて、思考スキルを活用して、より目的・場面・状況当にに応じたものに修正したり、パフォーマンスの仕方を導き出したりすることが思考力の中核となると言える。授業においては、思考スキルの活用方法を指導したり、思考スキルを用いるようなタスクを用意することが重要である。

② Transformability (変容可能性) としての思考力・判断力・表現力

藤森 裕治 (信州大学)

次期学習指導要領において、国語科では思考力・判断力・表現力に対するこれまでの考え方を抜本的に改めた。すなわち、結果として観察される言語活動の遂行能力としてではなく、言語活動の諸特性に応じて、個の内面で開発されるべき資質・能力としてこれを捉えることにしたのである。換言すれば、outcome ベースの学力観から possibility ベースへの改訂と言ってよい。こうした改訂の背景には、「国語科教育の学習指導は子供の未来への投資」という基本哲学があると発表者は考えている。

母語教育たる国語科教育にとって、教科内容は学習者の人格形成と切り離すことができない。予測不可能な未来社会を生きる学習者が、失敗を恐れずに困難に挑戦し、寛容性をもって他者を尊重し、言語文化の担い手として人生を豊かにしようとする。そのために必要な言葉の力こそ国語科における資質・能力の本質である。このような認識で思考力・判断力・表現力の在り方を捉えると、固定的なレベル概念によってこれらを系統化し、その到達度を設定する学力観は限定ないし否定せざるを得ない。なぜなら思考力・判断力・表現力は未知の状況への対処能力であり、民主的な社会人として生きるために学習者自らが変容していく資質・能力として認識されなければならないからである。

このような学力観に基づく教育実践は英語圏にも存在する。発表者はケンブリッジ大学とイギリス国内300超の学校が取り組む Creating leaning without limits project (「限界なき学びの創造」プロジェクト) に注目している。これは、子供の学びに限界を設けないという理念の下、育てるべき学力を Transformability (変容可能性) と命名して、協働性と信頼を軸に、個に応じた教育実践を創造する営みである。本発表ではこのプロジェクトがもつ教育理念を紹介し、次期学習指導要領において我が国の国語科教育が目指す思考力・判断力・表現力と比較し、これを広く言語教育というフィールドへ敷衍した際に見出されるべき知見を展望したい。

③ 生徒の「思考力・判断力・表現力」を育てる指導の実際

津久井 貴之 (お茶の水女子大学附属高等学校)

学校現場での実践という視点から、本テーマについての私の実践と課題を整理したい。

現在、本テーマに関わるのところでは、次の3つを意識して実践を行なっている。

- A) 技能統合型の言語活動を行うこと
- B) 主体的・対話的で深い学びが起きる支援や活動を行うこと
- C) 活動の目的を明確にすること(タスクや評価の明確化)

現場では、学校や生徒の実態に応じて様々な課題や障害が立ちふさがる。しかし、そんな状況にあっても生徒の「思考力・判断力・表現力」を高めるための指導を行っていかなければならない。次に、上記の A)～C) を行う上で特に大切だと感じていることを整理すると、以下のとおりである。

- A) 教科書単元に軽重をつけられるか、教科書1レッスンの構成を把握できているか
- B) 教師自身の英語学習観の転換ができるか、主体的な学習態度を促す支援があるか
- C) all or nothing ではなく、できることから始められるか

まさに、教師自身の「思考力・判断力・表現力」が問われる今日、日々の授業の中で求められる具体的な変化や改善点についてお話したい。